
異世界に呼ばれた雷鼠の物語～レオンのビスコッティ王国奮闘記～

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に呼ばれた雷鼠の物語〜レオンのビスコッティ王国奮闘記〜

【Nコード】

N3434T

【作者名】

三月語

【あらすじ】

桃香らと共に三国統一を果たし、平和を謳歌していたレオン。

凡ミスで魔法陣に落ち、行き着いた先は・・・別世界!?

今、レオンの新たな確率事象物語が幕を開ける!

Episode 01

召喚！？（前書き）

勢いで始めました。

この小説は『雷鼠夢想』の番外続編と思ってください。

ついでにレオンは姿が変わります。

まあ、こんな長々とした前書きは無しにして、本編をどうぞ。

後書きはレオンがいなくなった後の話です。

Episode 1

召喚！？

蜀、益州の城下町。

「いやー、平和になったねえ〜・・・」

「そうだねえ〜・・・」

「・・・でも、まだ危険視すべきところは残ってますし・・・」

その大通りを歩く三人・・・いや、二人と一匹。

平和を謳歌しているのは蜀の王、劉備こと桃香。

そしてその横で意見を言っているのが鳳統こと雛里。

更にその横で平和そうな一言を言ったのが、我らがチート主人公、レオンだ。

「でもさ、こうやって国王がこうやって街をぶらぶらと歩き回っても何も起きないって言うことはあ〜、平和だって証拠だよ〜」
「と、桃香様・・・」

あまりにも桃香が浮かれている（平和に、ということもあるが、レオンと一緒にいるということが結構大きい）ことに困り始めた雛里であった。

「そんでもさ？小さな事件の一つでも起きれば、多少の刺激にもな
ると思うんだけどねえ？」

「いやいやいや、ご主人様？事件はない方が一番だよー？」

「そ、そうですよ・・・」

レオンの冗談にすかさず突っ込む二人。

そんな二人と一匹にこの後、事件が、しかも大きなものが起こると
は思いもしなかった・・・

それは永遠の別れともとれるものになるとも思わない・・・

城の階段で・・・

「あ。」

「ちよっ！？ご主人様！？」

レオンが不意に階段を踏み外して落ちた。

それを二人が助けようとして駆け降りた時、不意に犬が一匹茂みから現れ、剣を地に突き刺した。

ちなみに、まだその地点までは距離がある。

「えっ!?!」

「い、犬!?!」

そして展開される魔方陣。

車は急に止まらない。

「せめて桃香達だけでも・・・っ!」

ドンッ!!

「えっ!?!」

「ご主人様!?!」

レオンは自分と桃香らの間に見えない障壁を張り、二人を自分の方へ来させないようにした。

「ごめん、ここから先は一方通行だから・・・僕だけが行くね・・・」

「ご主人様！？なんで何もしないの！？」

何もしないレオンに桃香はただ驚くだけ。

雛里は茫然と立っていた。何が起きているのか把握できていないのだ。

そしてレオンは別れを告げた・・・

「二人とも、ごめん。皆によろしく伝えておいてね・・・」

そして、レオンを飲みこんだ魔方陣は、突き刺した犬がそれに飛び込んだ時、消失した。

「・・・はっ！」

そして雛里は覚醒した。

「と、桃香様！み、皆さんにこのことを伝えないと・・・」

桃香に意見をしたが、桃香は・・・

「・・・・・・」

呆然としていた・・・

「と、桃香様・・・？」

雛里が改めて声をかけた時。

「・・・(ぶわっ)」

「と、桃香様!?!」

「じゅじんさまぁ〜・・・」

突然号泣した。

Episode 01

召喚！？（後書き）

「レオンがいなくなって」

「（愛紗）何！？ご主人様が！？」

「（雛里）は、はい・・・」

「（紫苑）ご主人様は二人を巻き込みたくなかったのかしら・・・」

「（華琳）で、桃香はあぁなっているわけね。」

「（桃香）ごしゅじんさまぁ・・・ぐす・・・」

「（朱里）桃香様、ご主人様のことを病的に好かれてましたから・・・」

「（雪蓮）桃香が立ち直るまで私たちがどうにかするしか無いみたいね？」

「（華琳）そうね。一国の王が何時まで泣き続けるかも気になりはするけど。」

「（桃香）ごしゅじんさまぁ・・・」

「（星）・・・あれはあれでまた亡霊のようだな・・・」

EPISODE 02 おいでませフロニヤルド、死神が勇者として目覚めた時

レオン、フロニヤルドについて降臨！

戦場に立つ前までです。

EPISODE 02 おいでませフロニヤルド、死神が勇者として目覚めた時

「はっ、はっ、はっ、はっ・・・」

一人の少女が階段を（どういう風に作ったのかは分かりません。というか私はああいう階段を上りたくありません・・・by作者）駆けあがっていた。

「・・・あっ！」

不意に目的地である祭壇を見た時、その上に一筋の光が落ちてくるのを見た少女は思わず嬉しげな声を上げた。

「・・・なんか、桃香達に悪いことしちゃったかな・・・？でも、連れていくわけにもいかないんだよね・・・。ここが僕の死地になることを僕自身が望んでいるんだから・・・」

光の中でそう呟くレオン。

そしてその光は祭壇の中央に稻妻を纏いながら当たり、霧散した。

「はっ・・・ふっ・・・あっ！」

そして少女が階段を上りきった先には、花の蕾のようなものが鎮座していた。

それを見た少女は思わず喜びの声を出した。

そして、その蕾が花開いた時、一人の人間が姿を現した。

「痛ってー・・・擬人化してら・・・。・・・お？」

今までの間で起きていたことを整理し、擬人化も起きていたことを悟ったレオン。

包んでいたものが霧散した時、初めて目の前にいる少女に気付いた。

同時に、今いる場所がい世界だ、ということも。

（レオン：・・・なぜに犬耳？犬尻尾？）

そして、その少女が口を開いた。

「初めまして、召喚に応えてくださった、勇者様でいらっしゃいますね？」

「は？勇者？僕が？」

「はい。私、勇者様を召喚させていただきました、ここビスコッティ共和国フィリアンノ領の領主を務めさせていただいております、ミルヒオ レ・フィリアンノ・ビスコッティと申します。」

「え、あ、ご、ご丁寧にどうも。僕はレオン。レオンハルト・ハイドアウト。」

「勇者レオンハルト様ですよ？存じ上げております！」

律儀にミルヒオ レに挨拶を返すレオン。

その横を一匹の犬が通っていた。

「ワウツ！」

「タツマキ！勇者様のお出迎え、大義でした！」

「いやだから勇者って何なのさ？」

話についていけず、まだ疑問符が頭に残る。

「勇者様におかれましては、召喚に承えていただき、ここフロニヤルドにお越し頂きまして、誠にありがとうございます。私たちの話を聞いていただき、その上でお力を貸して頂くことは、出来ないでしょうか？」

「あ、あのさ、まずそのお話ってやつを聞かせてもらえると大変嬉しいんだけど……」

「はい……（ヒュウウウウウ……ドオン！）っ！」

ミルヒオ レが話し始めようとした時、彼女の後方で空砲が鳴った。

「いけない！もう始まっちゃってる！」

「はじ……まってる？」

レオンがまたわけのわからないと言った顔をした。

「我がビスコッティは、今、隣国と戦をしています。」

「っ！」

『戦』という言葉に反応するレオン。

彼が先程までいた世界では、戦があつた。

無益な戦いもあり、数多の人が血を流し、死んでいった。

大切な人が傷ついて、倒れていった。死にかけたこともあつた。

自分の命を捨てようとした。

それを知っているが故に、思うところがあるのだ。

その頃、砦では激戦が繰り広げられていた。

それを遠く離れた地点から眺める一群。

「いやあ、砦攻めは好調すなあ……。この分ならすぐにでも・・・」

男がそう言った時、砦の門が開いた。

中に入り込んだ兵士が開けたのだ。

外にいた兵士たちの声が上がり、彼らの士気も上がる。

「開きましたぞ。」

「よし。砦の門へ突撃する。」

「はっ！」

そして、その軍の大將たる女性が声を上げた。

「行くぞ者共！今日こそフィリアンノ城を落とす、犬姫と騎士共を泣かせてくれよう！」

『おおおおおおおつ！！！！』

開戦の知らせであろう空砲を聞いて、慌てて階段を下りる二人。
麓に降りた時、何かが目に付いた。

「クアアアッ！」

（レオン……鳥？）

そして二人が着いた時、その鳥（？）はしゃがんだ。

「こ、これって、鳥？」

「あ……。セルクルをご覧になるの、初めてですか？」

「いや、まあ、元々いた所にはいなかったよ……」

レオンが言葉を濁らせて言う。

ミルヒオ　レがセルクルに乗り込んだ。

「私のセルクル、ハーランです。どうぞ、お乗りください。」

「いやー、乗らなくても僕は大丈夫だし・・・」

「大丈夫・・・ですか？ここからだと遠いですよ？」

「大丈夫だ、問題ない（キリリッ）。」

どこかの名言を用いて、問題ないことを告げた。

セルクル ミルヒオ レのセルクル、ハーラン を走らせ
て目的地に向かうミルヒオ レ。

その横を殆ど同速で走っているレオン。

「隣国ガレットと、我が国ビスコッティは、度々戦を行っているのですが、ここのところはずっと、敗戦が続いて……。いくつもの砦と戦場を突破され、今日の戦では、私たちの城を落とす勢いです。」

「落とされる寸前……。か……。」

話を聞きながら、レオンは先程までいた世界のことを反芻した。

自分もそういう経験があるから分かる。

「ガレット獅子団領国の領主、百獣王の騎士、レオンミシエリ様と渡り合える騎士も、今は、我が国にはいなくて……。ですから、勇者様たちに力を貸して頂きたいのです！」

「え、僕？こんなグータラで怠け者で平和主義で傍觀者的存在で死神な僕が？」

走りながらだが、全く息を荒げていないレオンはミルヒオ　レに聞く。

「そんなご謙遜を！勇者様のお力は、よく存じ上げております！」

そしてハーランは山岳エリアをある程度超えたところで足を止めた。

《さあ、本日も絶好調で、熱い戦が進行しております！》

放送が流れていた。

レオンは誰よりも眼が良かったため、その戦況が良く見えていた。

傍から見れば、何と微笑ましいことか・・・

「・・・何？これが戦？何この可愛らしい・・・というか微笑ましい
というか・・・すっげ和む・・・」

『初めて見た戦』にレオンは半ば呆れ、半ば和むという不思議な状況
になっていた。

「はい。戦場をご覧になるのは初めてですか？」

「初めてというか僕の知ってる戦と違うし・・・」

聞かれたことに半笑いで返す。

「つーことは何？この戦で人が死んだり怪我したりっつーことはな
いわけ？」

「とんでもない！戦は、大陸全土のルールに則って、正々堂々で行
うものですから。怪我や事故が無いように努めるのは、戦開催者の
義務です。もちろん、国と国との交渉の一手段でもありますから、
熱くなってしまうことも時にはありますが・・・。だけど、フロニ
ヤルドの戦は、国民が健康的に、運動や競争を楽しむための行事で
もあるんです。」

「・・・平和、なんだね。」

ミルヒオ レの説明を聞いて、自分たちのいた世界との違いを改めて実感するレオンであつた。

そんな時、レオンの手を取るミルヒオ レ。

「お？」

「敗戦が続いて、我々ビスコッティの国民や兵士たちは、さみしい思いをしています。何より、お城まで攻められてしまったとあれば、ずっと頑張ってきた皆は、とてもしょんぼりします・・・」

「しょん・・・ぼり？」

再び疑問符が上がる。

「しょんぼり・・・です・・・」

俯きがちに告げる、その顔はどこかさびしげだった。

「・・・なるほどね・・・」

その言葉を聞いて、レオンは思考に入る。

「おし！姫様！」

「あ、はい。」

「確認だけど、僕はこの国にとっての勇者なんだよね?」

「はい。私達が見つけて、私が迷うことなくこの方だと決めた、この国の、勇者様です!」

ミルヒオ レはレオンに対し、強く言い張る。

「OK。ミルヒオ レ・フィリアンノ・ビスコッティ姫。我は貴女の召喚に応じよう。民を悲しませないために、国民を思う姫を悲しませないために。死神改め勇者レオンハルト、ビスコッティ共和国に助力致す!」

「あ・・・ありがとうございます!」

「こちらこそ!目一杯暴れさせてもらうからね!」

勇者の協力を得られ、喜びが顔に出るミルヒオ レ。

「では、急いで城に戻りましょう!装備も武器も、みんな用意してありますから!」

「・・・いんや、装備や武器は大丈夫。こっちでいつでも作れるから。」

「わかりました・・・。タツマキ、ハーラン!」

駆け寄って、手の甲を見せた時、紋章が浮かぶ。

「いきますよ、ハーラン!」

「クウウウウウツ！」

ハーランが一声鳴いた時、翼が巨大化した。

「では、勇者様！」

「・・・いや、僕は飛んでいけるから。」

「と、飛んでいけるのですか!？」

「ま、こういう方法で、ね！」

そう言っつてレオンは背中に翼を生成する。

毎度お馴染ゼロカスタムタイプの翼だ。

「じゃ、先導よろしく！」

「はっ、はいっ！」

ハーランは助走をつけ、飛んでいく。

「へー。ホントに飛んでるんだ・・・」

「飛びますよー！ハーランは飛ぶの得意ですから！」

一方、フィリアンノ城は・・・

「あぁっ！姫様が、勇者様を連れて帰ってくるであります!!」
「おおっ・・・」

バトルフィールドでは・・・

《今、大変なニュースが入りました！ミルヒオ レ姫が、この決戦に、勇者召喚を使用しました！！これは凄い！戦場に勇者が現れる

のを目にするのは、私も初めてです！さあ、ビスコッティの勇者は、
どんな勇者だっ！？」

視点再びフィリアンノ城。

「フィリアンノ城メイド隊！勇者様の装備と武装の準備は万端ですね？」

『はいっ！！』

「よし、勇者様到着後、30秒で着替えを完了させます！！」

『了解！！』

ちなみにメイド隊はこの後、この準備が無駄になるとは思いませんでした……

改めてバトルフィールド。

「勇者殿が！？」

別の視点。

「本当に・・・！？」

そしてフィリアンノ城バルコニー。

「姫様！！」

「リコ、ただいまです！」

「おかえりなさいであります！」

ミルヒオ　レがりコと呼ばれた少女からマイクみたいなものを受け取った。

「勇者様、来てくれたんでありますね！？」

「はい！私たちの、素敵でカツコイイ勇者様です！！」

そしてバルコニーの先まで歩いていき・・・

《ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん！お待ちせしました！近頃敗戦続きの我らがビスコッティですが、そんな残念展開は、今日限りでおしまいです！！ビスコッティに希望と勝利をもたらしてくれる、素敵な勇者様が来てくださいましたから！！カメラさん、櫓の天辺を映してください！！》

カメラがそうして何も無い櫓の天辺を映す。

《華麗に鮮烈に、ご登場いただきましょう!!》

そうミルヒオ レが告げた時、その櫓の天辺に雷が落ちた。

そして現れたのは、黒い外套に体を包んだ人間。

「はっ！」

そしてその人間は空へと舞い上がり、外套だった翼を広げて着地した。

その様相、死神の如し。

振り回す鎌は、死神を模して。

演出は、派手に・・・

そんな感じで登場したのは・・・

「ビスコッティ共和国王女、ミルヒオ レ・フィリアンノ・ビスコッティの召喚に応じ、レオンハルト・ハイドアウト、此処に推参！」

!

EPISODE 02 おいでませフロニヤルド、死神が勇者として目覚めた時

（レオンがいなくなってからその2（時間軸はズレますが））

「（愛紗）・・・はあ・・・」

「（鈴々）姉者、溜息をつくと不幸になるー、ってレオンが言ってたのだ。溜息はダメなのだ。」

「（愛紗）溜息もつきたくなる・・・。あの日以来の桃香様を見れば分かるだろう？」

「（鈴々）・・・確かにやつれすぎ、って言えるのだ・・・」

「（愛紗）一体どうすれば『うわあああああん！』桃香様！？」

桃香に何があったのか？

・・・待て次回！

次回

EPISODE 03 レオン初陣！

EPISODE 3 レオン、初めての戦！（前書き）

レオン、初陣！チートさが伺えますが気にしない方向で！

EPISODE 3 レオン、初めての戦い！

《ゆう・・・っ！勇・・・っ！勇者光りいいんっ！！ここフロリヤルドで、国を治める王や領主にのみ許された、勇者召喚！！》

実況のフランボワーズが興奮したように叫んだ。

この説明から分かるように、勇者召喚は国王や領主にのみ許されるもので、滅多に行われないものなのだ。

《私も、見るのは初めてです・・・！》

《そう！その希少な勇者が今！我々の目の前に現われましたあっ！！》

その間、レオンは騎士団長、ロランの元へ走っていく。

そして歓声があちらこちらから上がる。

城。

「・・・でも姫様、あの勇者様、こっちの戦の作法とか、知らない
のでありますよね？だいじょうぶでしょうか・・・？」

「大丈夫です。お伝えしましたし、今はちゃんとロランが確認して
くれていますし。」

フィールド。

（この時点でロランにはレオンから勇者様とは呼ばず『レオン』と
親しみを持って呼んでくれと頼み、ロランは了承していた。レオン
が『戦友なんだから、そんな堅苦しいことは止めにしてさ？』と）

「・・・うん。ルールもルートも、しっかりと覚えていてくれたよ
うだね。」

「ああ。ミルヒオーレ姫に教えてもらったし、何より・・・」

レオンは頭を突いて・・・

「物覚えだけは誰よりもいいって自負してるから。」

「ふむ……。勇者殿は召喚されて、姫様と会って、どう思った？」

「国を思い、民を思う、領主としてあるべき姿をしっかりと、それであって傲慢では無く優しい。いい領主になれると思ったね。」

レオンがそう言った時、ロランは彼の肩に手を置いて……

「素晴らしい！」

と言った。

「当然！僕の観察眼、舐めないでほしいね！！」

レオンもそう言い返した時、遠くの方で声がした。

敵が攻めてきたのだ。

「ではレオン！前に進んで、先陣のエクレールと合流を！若草色の髪の少女だ！」

「OK！」

そしてレオンは武器を鎌から大剣に変え・・・

「我は空・・・、我は鋼・・・、我は刃・・・！我が名はレオンハルト、推して参る！！」

数分前・・・

レオンたちは城でミルヒオ　レから戦についての説明を受けていた。

「レオン様、改めてルールの説明と最終確認をさせていただきますね？」

「お願い。」

レオン自身は着替える必要がなかったため、何もしていない。

「まず、襲ってくる相手戦士は、どんどん倒していつちやいましてう。」

「へえ？倒すことに関してはとにかくやっちゃえ、な訳？」
「はい。」

レオンの確認に頷くミルヒオ レ。

「そして、相手戦士が、武器で強打を与えられれば、ノックアウト
おー！」

「強打・・・」

ミルヒオ レは軽くオーバーアクション気味に説明。

「ノックアウト判定をされた相手は、けものだま、獅子団の方たちはねこだまに変化。一定時間、無力化します。」

「あれ？僕はどうなるの？」

着替え終わって出てきた桃香が自分たちの場合を聞いた。

「勇者様は・・・けものだまにはならないのです。」

「うん、これはハンデだ。かなりハンデになる。けどアドバンテージにもなる。そんな感じだね。」

「そうなりますね。では続いて。相手の頭部が背中に、手のひらで触れるだけでも、ノックアウトです！」

「頭部か・・・背中を？」

「はい」

ミルヒオ レが笑顔で答える。

「それで、タッチアウトはちょっと危険が伴う分、タッチボーナスが入ります。以上がルールです。お分かりいただけましたか？」

「十分！要は相手より点を取ることが重要、タッチボーナスを組み込めばもつと点が取れるってこったね？」

「そういうことです！ああ、そうでした。戦場は平野や山の中ということもあります、吊り橋や移動する足場など、不安定なところもあります。でも、落ちても大丈夫ですから、ご安心を。」

そして戦場。

レオンが走っていった先に、3人のガレット兵が。

「おわあ、すげえ！マジで勇者だ！！」

「勇者倒したら、俺らすごくねえ！？半端なくねえ！？」

「やったるぞおら つ！！」

3人で突っ込んできた時だった。

「カーネージ・・・シザアアアアアッ！！！」
『ぎゃあああああああ！？』

強打を受けて上に吹き飛ばされ、あっさりとねこだまにされた。

「ふっ！！」
『にゃううゝ・・・』

レオンが悠々と体勢を戻した時・・・

『うおおおおおっ！！』

二人同時に攻めてきた。

「無駄あつ！！」

レオンは後ろに跳躍し・・・

「消滅（Close）！！」

手に持っていた大剣を消し・・・

「当たらない、ってねえ！！」

『あつ・・・』

ほぼ同時に背中に手を当てた。

『にゃく・・・』

そして二つのねこだまが逃げて行った時レオンも水柱を上げながら同時に着地した。

「・・・影！？」

気配を感じ、上を見たら・・・

「へへえ・・・」

既に剣を振りかぶっている兵士が。

そして振り下ろされたが・・・

「貴様らには・・・」

レオンは既に上に回り、その兵士の後頭部に手のひらで触れた。

そしてそのまま五人のまともりに向かっていく。

「情熱、思想（この時点で一人背中に触れる）、理念、頭脳（ここ
でまた一人後頭部に触れる）、気品、優雅さ、勤勉さ（ここでも一
人）！！そして何より（連続して二人の後頭部に接触）！」

どこかで聞いたかのような台詞を言いながら確実にタッチアップし
ていく。

そして空中で回転して着地し・・・

「速さが足りないっ！！！」

『うわああああああっ！！！！』

兵士が煙に包まれ・・・

『にゃ~~~~!?!』

一斉に兵士がねこだまになった。

「速さが足りない相手なんて、恐れるに足りない、ってね!」

そしてまた走り始めた。

《・・・はっ・・・?え・・・っ!?うええええええええっ!?は
っ・・・、はっ・・・、速iiiiiiiiっ!?》

想像以上の速さに実況席も驚きを隠せない。

《何をしたのかよく分かりませんでしたがあ!撃墜スコアも続々加

算！まさかここから逆転なるかあ！？》

スコアもガレット側に迫る・・・いや、それをも上回るかのような勢いで加算されていく。

《ともあれこの勇者、やっぱり、只者ではなさそうです！！》

城。

「おお～～～～・・・」

リコは驚きの顔をしていた。

「もちろん！勇者様ですから」

ミルヒオ　レは『当然！』と言う顔で言った。

ちなみにこの時のリコの顔は桃香が某変態仮面（誰が変態仮面だ！私の名はかt y b y常山の昇り龍らしき人）に見せていたかのような顔になっていた。

レオンは快進撃を続けていた。

レオンが吊り橋前にいた兵を薙ぎ飛ばしてその勢いで吊り橋の兵を突き落とす。

「・・・移動する足場・・・」

レオンは水車のような足場を見て足を止めた。

「面倒だから飛翔っ！！」

水車を展開した翼で飛んでいく。

「ほいつ、足場突破!!」

余裕綽々なレオンの前に・

「隙ありい　　っ!!」

「勇者覚悟お　　っ!!」

二人の兵士が。

「だーからあー! 速さが足りない! っつつてんの!!」
『ぎゃ ああああああ!!』

ガレット軍陣地。

「これはまた・・・やるもんですなあ・・・」
「・・・面白い。」

レオンミシエリとゴドヴィンがレオン無双を見ていた。

「どおれ、一つ試してみるかのお？」

そしてレオンミシエリは不敵な笑みを浮かべた・・・

前線・・・

一人奮戦している少女、エクレールに対し大群が押し寄せる。

「姫様の決断とは言え、別に勇者などいなくても・・・！」

迫る大軍に対し、双剣を交差させ、後方に紋章を浮かばせる。

「『裂空・十文字』!!」

そして一閃。

放たれたそれは大群に当たり、ほぼ全てがねこだまになった。

「ふう・・・」

そして溜息をついた時。

「せいやあっ!!」
「っ!!」

残っていたガレット兵が不意を突いて攻撃を仕掛けてきた。

が。

「紅凰裂降オ
「おぎゃ
「あ。」

駆!!」

っ!？」

突然突っ込んできた謎の焰の鳳凰に思わず呆けた声を出したエクレール。

そして墜落した。

「うーん、
にゃ〜〜〜」

兵士はねこだまになっていた。

「よっ！ミルヒオレ姫に勇者と呼ばれたレオンハルトだ！」

「……エクレール。騎士団の親衛隊長だ。」

「・・・OK。協力対象と合流、つてね。」

「協力対象？」

エクレールが疑念の目でレオンを見た時だった。

「・・・そんじゃ、エクレール。ミルヒオ レ姫から『紋章砲の扱いは、エクレールが一番上手いだろうから、教えてもらえ』って言われたけど・・・。僕は紋章術試してみたけどうんともすんとも言わなかったからとりあえず使用方法だけでも教えてくんない？」

「そ、そうか……」

?

一瞬エクレールの顔が赤くなったのをレオンは見逃さなかった。

「まず、自分の紋章を発動させる。」

「紋章を発動、ね・・・」

雖里の右手の甲に鳳凰の形を模した紋章が浮かび上がる。

「全身の力と気合を込めて、紋章を強化！！・・・LV2！」

紋章が背後に浮かぶ。

「LV3！！」

そしてより紋章が大きく、くつきりと形をさせる。

「フロニヤ力を気力に変えて、自分の武器から撃ち放つ！」

「それが・・・紋章砲・・・！」

目の前には敵が迫る。

「てえあああああああつ！！」

エクレールは短剣を振り上げて砲撃を。

『うわあああああああつ！！！！』

紋章砲が敵を飲みこみ、空へと舞い上がっていった。

その後には、ねこだまが逃げたり気絶していたりしていた。

「なるほど……。さすが親衛隊長。」

「お、おだてても何も出ないぞ……。コホン！紋章砲は便利だが、防具や甲冑を許された戦士や騎士団長には防がれることが多い。それにより……」

「疲労問題がある、ってことね。ご利用は計画的に、というやつ？」

「そういうことだ。使えないなら考えることはないがな。」

「ま、ありがと。これを応用すれば大技ぶっぱできるかも。」

レオンはエクレールの耳がピクツと動いたのを見た。そしてその後……

「……っ！ゼロウイング・モードシールド展開！」
「っ！？」

同じく気付いたであろうエクレールよりも先に体が動いていたレオンは、より広範囲に防御が張れるウイングシールドを展開し、前に立ち塞がる。

そして、そのシールドに矢が当たり、押し合いを始めた。

「く……そおおおおおおいっ！！」

強引に矢の軌道を変え、明後日の方向に飛ばす。

「……不意打ちつてのはないんじゃないのかい！？こんなほんわか和みモードを台無しにするとかエアリーディング10級すら取れないと思うよ！？」

「……期待通りの実力のようだなによりだ。犬姫の手下にしてはなかなかやるな。」

「犬姫でなんぞや！？よくわからん！！」

丘の上に現れたのは・・・

「レオンミシエリ姫!？」

ガレット獅子団領の領主、百獣王レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワだった。

「・・・姫が戦火にわざわざ殴り込みとは・・・どつかの酒飲み国王を思い出すねえ？」

レオンはその『どつかの酒飲み国王』を思い出して苦笑していた。

その間にレオンミシエリは弓を放り投げ・・・

「ちつつ・・・。姫などと気安う呼んでもらっては困るの・・・。我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして百獣王の騎士!閣下と呼ばぬか!この無礼者があつ!！」

瞬間、彼女が放った覇気が辺りを覆い尽くした。

「・・・閣下、ねえ？」

レオンはそれを目を閉じて流していた。

愛紗らが啞然として見ていたら・・・

「（焰耶）桃香様ーっ！」

「（朱里）愛紗さん、何かあったんですか!？」

一同、集結。

「（愛紗）・・・いや・・・その・・・なんだ？」

「（鈴々）・・・なんとなく・・・分かんと思うのだ・・・」

直後に聞こえた桃香の駄々に一同、

『ああ、なるほど・・・』

と頷くだけだった。

ついでに。

「ご主人様・・・くすん・・・」

雛里も半分同じだった。

続く!?

次回、EPISODE 4 猫閣下VS死神鼠

EPISODE 4 猫閨下VS死神鼠（前書き）

第二話後半です。

タグの意味が分かります。

EPISODE 4 猫閣下VS死神鼠

《来たあ つ！！来ましたあっ！レオンミシエリ閣下、
戦場に到着！！愛機のドーマも、相変わらず凛々しい！！》

レオンミシエリの放った覇気が、辺りを覆う。

だが、一人だけそれに全く動じない者がいた。

「へえ……？ たった一国の王がここまで咆哮に覇気を纏えるとは
ねえ……？」

「ゆ、勇者！？ お前は何ともないのか！？」

「あー、エクレール？ 勇者って呼ぶの禁止ね？ そういう呼ばれ方す
んの嫌だし。普通にレオンって呼んで？」

「は？」

エクレール、レオンの発言に呆ける。

「……ほう……？ ワシの覇気を受けてなお立っでいられるとは・
……。なかなかやるようだな……？」
「……へっ、こちら伊達に三国統一したわけじゃないんでねえ
？」

レオンは鎌を地に突き刺し……

「ならその言い方、そっくりそのまま、いや、倍返しにして返してやろうかい・・・？」

腕を組んでにやりと笑った。

「・・・何を・・・する気だ？」

エクレールはまだ呆けたまま。

「我が名はレオンハルト・ハイドアウト……。この世に生を受けた死神にして三国を統一した総国王・・・！」

「っ!？」

「なっ・・・」

放たれた覇気の感触が変わり、その場にいた二人の顔が驚愕に染まる。

「頭を下げる、この愚か者があつ!..!」

「~~~~~~~~っ!..!」

「くうっ・・・」

放たれた覇気は、レオンミシェリの放ったそれとはケタ違いのものであった。

重く、激しく、そして畏怖を与えるそれは、少し離れた位置にいたレオンミシェリですら気圧されていたのだ、近くにいたエクレールは堪らない。

「・・・っと。ごめんね、エクレール。怖くなかった？」

「・・・はっ！こ、怖いわけあるか！！急にするな！！／＼／」

いきなり突っかったエクレール。ただし、彼女の怒りは正当なものだ。

ちなみに顔が赤かったのはご愛嬌。

（・・・あの勇者、ワシの咆哮を何の苦もなく受け流し、その上ワシを咆哮もなく畏怖させた・・・）

その瞬間、口元がにやりと笑みを含む。

「勇者よ、どうやらお前を倒さなければ先に進めないようじゃな？」

「どうやら猫姫様は察しが良い様で何よりでさあ？」

「・・・（ピシッ）」

「・・・あ。」

今のレオンの挑発がレオンミシエリの逆鱗に触れたようだ．．．

ちなみに呆けた声を出したのはエクレール。

「．．．絶対に許さんぞ．．．！勇者．．．！！」

「．．．もしかして、逆鱗触れた？」

「．．．（コクコク）」

「．．．ゴメン！」

だが、その謝罪も空しく．．．

「お前を倒して．．．城を落とさせてもらおう！..」

やる気になっていた。

「．．．本気、らしいね。」

「．．．お前のせいだぞ．．．」「．．．今回ばかりは認める．．．」

そう言つてレオンミシエリを見た時．．．

「．．．紋章砲！？」

「あれは・・・！」

レオンミシエリは背後に紋章を浮かべ、すでに発射態勢に入っていた。

「ドーマ、下がっておれ。本当はこんな所で使いとうはなかったのだが・・・はあっ！！！」

そして、斧を突き刺す。

「獅子王・・・炎陣！！！」

刹那、地面から炎が噴き出始めた。

「・・・うわ、これはマズくないかい？」

「・・・最悪だ・・・」

迫る炎の柱に立ちつくす二人。

「つか紋章砲ってここまで出来るもんなわけ？」

「レオ姫のは桁が違う！倒されたくなければ・・・とにかく逃げるのみ！」

「・・・いや、逃げなくても構わないさ。・・・失礼!!」
「わっ!!? / / /」

そう言つてレオンはエクレールを抱きかかえる。所謂お姫様だっこ。

「こ、こら! 離せ! 離せえ!! / / /」
「一世一代の大脱走劇と洒落込みますか?」
「な、なに!!? / / /」

レオンが背を向けて走り出したその直後。

「大! 爆破あつ!!」

ドオオオオオオオンッ!!!

一方城でも、その大爆発が見えた。

『・・・あつ・・・』

ミルヒオ レトリコ、二人が息を飲んだ。

《ば くは

っ！！レオンミシ

エリ閣下必殺の、『獅子王炎陣・大爆破』！！範囲内にいる限り、立っている者はいないという・・・壮絶威力の紋章砲！！ここに味方がいなかったのが幸いです・・・。味方がいたら、味方も巻き添えにしてしまう問題がありますから・・・。で、ですが、凄いい！！』

爆破の黒煙が消え失せた後の実況である。かなり白熱している。

「フランボワーズ！確認せい！生意気な勇者と垂れ耳はちゃんと死んだか！？」

《あーはい！えーつとですね・・・》

遙か上空。

「しっかり捕まっときなよ・・・？」

「あ、ああ・・・」

「・・・じゃ、行くよ・・・？あの紋章砲を超える史上最強最悪の
大撃・・・！」

生成した杖を前にかざし・・・
レイジングハート・レプリカ

「フロニヤ力を魔力に変えて・・・更に足りない分はGN粒子を生成、伝導・・・！」

目の前に黄色の球体が出来上がり、それは徐々に大きくなっていく。

「な、なにをする気だ・・・？」

「まあ見てなつて・・・！さあ、戦場にいる全ての皆さん！今ここに大きな光を降臨させましょうか！！」

《そ、空あ つ！？勇者と親衛隊長、無事です！しかも
何やら準備している模様！？》

何があつたか・・・

「ダメだ、このままじゃやられるだけだ・・・」
「仕方ない、切り札を同時に使うとしますか・・・！エクレール、
喋ってる舌噛むよ！！」
「な、なにをする気だ！？」
「TRANS-AM！！」

迫る一瞬、レオンの体の中にある擬似GNドライブがフル稼働し、

体が赤く発光する。

これがレオンの真骨頂、『生体TRANS-AM』だ。

「そのままゼロウイング背後生成・・・！そんなもって・・・っ！」
「えっ！？わっ、きゃああああああ・・・」

上空へ急加速で飛翔した。

《・・・何かしようとしているようですが、このままではレオ閣下の
的だぞおっ！？》

「ところがギッチョンっ！！ってねえっ！！」

某傭兵の台詞を言い、レオンは・・・

「TRANS-AM！アーンド・・・」

杖を構えて・・・

「あ、そうだエクレール。」

「な、なんだ!？」

「これ反動強いからさ、後ろからどうにか反動の相殺頼めないかな・・・？」

「む、無理言うな!!」

「・・・しゃーなし、か・・・」

杖の先端の光がかなり大きくなった。

「じゃあレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ!これが僕の・・・
必殺技!!星をも砕く、破壊の一撃を受けてみる!!スターライト
オ・・・ライザア

っ!!」

《なっ・・・、なっ・・・、なんだあああああっ!？紋章砲なのか!？あれは紋章砲なのか!？しかし背後に紋章は浮かんでいな

かったようにも見えました！！ならばあれはなんだったのでしょうか！？」

迫る閃光。

「ちっ！」

それをレオンミシエリはギリギリ回避。

（・・・なんとという砲撃・・・。あれが紋章砲じゃないとなると・・・奴の紋章砲はどれほどの威力を・・・！？）

そんなことを考えている内にレオンは余裕綽々で着地。

「さあ、ここからはタイマン！負けないからね？」

「面白い・・・ひよっこがどこまでやれるか・・・見物だなー！」

「はつきり言やあ・・・こっちの方が年上なんでねえっ！！」

（レオンミシエリ＝１６。レオンハルト＝２０）

『おおおおっ！！！！！！』

大斧と大剣（セラミック製）がぶつかり合う。

火花が散り、一進一退の鏖迫り合い。

「・・・まさか・・・レオ閣下と互角、あるいはそれ以上の実力者がいるなんて・・・」

ただそれを見ているだけだったエクレールは素直にそう言っていた。

「・・・流石、『閣下』と名乗るだけの実力はあるようだねえ・・・？」

「・・・そちらも、伊達に三国統一を果たしただけはあるようじゃない・・・！」

二合、三合と武器をぶつけ合い、その度鏖迫り合いが起こる。

それが何度も続いた時、その拮抗は崩れた・・・

そう、レオンミシエリの斧が砕け散ったのだ。

「なっ……！」

「これで……止めえっ！」

。そう言った瞬間、レオンが二人に分身（『かげぶんしんを』使った）

『食らえ、目に見えぬ紫雷の舞！』『レオン流大剣秘ノ式・紫雷双瞬殺劇』――！』

二人のレオンが同時にレオンミシェリに迫る。

「くっ！」

体を屈めて見えた一撃目を回避する。が・・・

「避けられると・・・」

「思っなああああっ！！」

一気に両側から二連突。

同時に着ていたものが瓦解。

あまりに一瞬のこと過ぎて、レオンミシェリは驚くしかなかった。

「うう・・・っ・・・」

その時の衝撃波が凄過ぎて、エクレールにも影響。尻もちをついた。

「・・・これにて・・・フィナーレ終劇・・・」

と言ってレオンの『かげぶんしん』は消えた。

「さーで、これ・・・で・・・」

レオンが改めてレオンミシエリを見た時・・・

扇情的な格好になっていて言葉を失った。

「・・・興奮し過ぎて、冷静さを欠いたようじゃな・・・。このまま続けてやっても良いが・・・、それではちと、両国民へのサービスが過ぎてしまうのぉ？」

「・・・なんというサービス精神旺盛な閣下なこと・・・」

レオン、ここで額を押さえる。

「レオ閣下・・・。それでは・・・」

「・・・うむ。早期撤退となるが、ワシはここで降参じゃ。」

白旗があがる。

《・・・まさか・・・！まさかのレオ閣下敗北！総大将撃破ボーナス、350点が加算されます！！今回の勝利条件は拠点制圧ですの

で、戦終了とはなりませんが、このポイント差は致命的！ガレット側の勝利はほばないでしょう！！」《

城。

「やったー！」

「やったでありますー！！！」

ちょうど決戦のあった場所。

「勇者よ、たった一騎でワシと対等、いや、それ以上の力を以てこのワシを倒したこと、流石と褒めてやろう。だが！今後と同じ活躍

が出来ると思うなよ?」

そして投げられるマイク。

「・・・へっ、感謝させてもらうよ、ガレット獅子団領国王、レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。だけど、今後も同じ活躍させてもらうよ! んでまた、一騎討ちやるうや! あんなに燃えた一騎討ちは体験したことなかったからね!」

「んむ!!」

背を向けた時、レオンミシエリは尻尾を使って一点を差した。

その先はエクレール。

「・・・なるほどね。渡せてことかい。ほら、閣下直々のご指名でっせ?」

マイクをエクレールに向けて放り投げるレオン。

「・・・撮影班、垂れ耳に寄れ。良い画が撮れるぞ。」
『・・・?』

撮影班が一斉にエクレールにカメラを向ける。

「うわわっ、おっと・・・」

ぴっ、はらり・・・（服に切れ込みが入り、木端微塵になって落ちていった）

「・・・きゃああああああっ！！／／／」

「撮影終了じゃボケ
っ！！エクレール、さっさとこ
れ着て！！」

エクレールが悲鳴をあげると同時にレオンが即座に隠すようにロ
ブを生成、エクレールに着るように指示。

《何が起こきたああああああっ！？親衛隊長の服が！突然木端微
塵になりましたあっ！！》

エクレールの服木端微塵という事態に、戦場が沸き上がった。

「・・・あ。」

「な、なんだ！？／／／」

「・・・エクレール・・・多分それ・・・原因はあの戦い・・・」
「・・・はあっ！？」

） 回想 ）

『避けられると・・・』

『思っなああああっ！！』

（この時衝撃波が発生）

『うう・・・っ・・・』

（結果、エクレールの服に多大なダメージを与えることに）

「・・・あ

っ！！！！！」

エクレール、絶叫。

「ホントにゴメン！わざとじゃないから！というかあれで衝撃波が出ると思わなかったわけで！更に言うとな前使った時近くにいた味方に何もなかったから大丈夫だっと思ってたんだって！！」

「・・・／／／（涙目＋睨みつけ＆蹲り）」

・・・この時、レオンにはダメージが一番あった・・・

《原因が判明しましたあっ！勇者がレオ閣下との戦いで使ったあの
大剣技によって生まれた衝撃波が服に多大なダメージを与えたよう
です！！それが原因でこうなったようです！！いやー、偶然の産物
つてあるものですねー。騎士エクレール、おいしい映像、ありがと
うございました！！》

「え、ええい、やかましいっ！！／／／」

実況によって原因が一体に知れ渡るように。

「はっはっはっは！！！」

レオンミシエリは一笑いし指をレオンに向けて・・・

「今度はきつちり侵略してやろう!」

そう告げて去っていった。

《ここでレオ閣下、堂々のご退場!これは次の侵略戦にも、期待が高まりますね!》

《全くです。ですがまだ、この戦が終わったわけではありませんからね。》

《そうですよ。前線の皆さん、最後まで気を抜かず、タイムアップまで頑張ってください!》

ビオレの一声で再び戦場が沸いた。

「・・・裸を見られた・・・裸を見られた・・・裸を見られた・・・」

「・・・なんかホントゴメン。悪気はないんだから許して・・・」

「・・・ノノ(ジトー・・・)」

「何この抗議の目線・・・?痛いよ、痛すぎるよ・・・」

エクレールの　にらみつける!

きゅうしょに　あたった!

こうかは ばつぐんだ！

「・・・なんか今懐かしい言い方が聞こえた気がするけど？」

「うう・・・ぐすつ・・・」

「・・・だあ　っ！もう！わーった、わーったから！僕が責任とりやいいんでしょ！？もう煮るなり焼くなり好きにしろってんだ！」

「せ、責任取れとまでは・・・言わない・・・／＼」

「・・・とりあえず本陣まで帰るか・・・。エクレール、ほら。おぶつてくから。」

しゃがんでおんぶしていくと言うレオン。

「そ、そこまでしなくていい！自分で歩ける！！／＼」

「あーもつこの強情が！！少しは甘えろ！」

「わっ、わっ！？／＼」

結局無理矢理おんぶをしたレオンであった。

本陣までレオンがエクレールをおぶって歩いている間・・・

「・・・／／／」

エクレールは完全に顔を赤くしていた。

『責任とりやいい』

（・・・ああいうのは面向かって言うものじゃないだろうが・・・
／／／）

そんなことを考えていたが・・・

自分よりも先に動いて自分を守ってくれたこと。

己を盾にして（本人はきつとそんな感じだった）自分を逃がそうと
してくれたこと。

自分を気遣ってくれたこと。

他にも色々なことがあった。それが・・・

（・・・でも、勇者・・・いや、レオンなら・・・、責任を取ってもらっても・・・いいかも・・・／＼／＼）

エクレールがそう考えるきっかけとなっていた・・・

本陣。（ちなみにこの時すでにミルヒオ　レが戦勝興行で何をするのかを告げていた）

「・・・お、いたいた！ロラン！」

「・・・ああ、レオン。それにエクレールも。」

「ごめん、エクレールの着替え、ある？」

「ちゃんと用意してある。あの後すぐに取ってきてもらったからな。お疲れ様、二人とも。」

「あ、兄上・・・」

（ロランが前に立ってエクレールの着替えの仕切りとなった）

「・・・ほんつとくにゴメン！公衆の面前で妹をほぼ全裸にしちゃ

「つたことは本当にゴメン!!」

「いいんだ、気にしないでくれ。それに・・・」

「それに？」

「・・・いや、なんでもないさ。」

「？」

後ろにいるエクレールを見て、言おうとしたことを止めるロランに、疑問符を浮かべるレオン。

「・・・しかしまあ、こちらの姫様は歌も歌えるなんて・・・」

「姫様は、他国との交流などの際、楽団を連れて世界中で歌われているんだ。」

「なるほど、世界的な歌姫、というわけ？」

「そういうことだ。ただ近頃は戦続きでツアーもすっかり滞ってしまっていてね・・・。我々も久しぶりに、姫さまの歌を聴けるくらいなんだが・・・」

「・・・んじゃ、僕も聞いてこうかねえ？楽しみだしね。」

「活躍してくれたレオンには、特等席で聞いて頂くとしよう!」

「そりゃいい!最高の観賞となりそうだ!・・・あ、ちょっとまって・・・」

レオンが空中に指を置いてみるが・・・

「あれ？」

「どうした？何かあったのか？」

「・・・コンソールが・・・開けない？わーお、これじゃ連絡も取

「れやしないっていう・・・」
『?』

いつの間にか着替え終わっていたエクレールも覗きこんでいた。

「・・・ダメだ、念話も完全シャットアウトしてる・・・」
『?』

「・・・もしかして・・・召喚された勇者って・・・連絡手段など一切合切無いってこと・・・?」

「ああ。召喚された勇者は、帰ることも、元の世界と連絡を取ることもできない。それが召喚のルールなんだ。」

「・・・マジで?」

「マジだ。だからこそ、勇者召喚はめったに行われなかったんだ。これは冗談じゃない。」

「・・・ならいいや。踏ん切りついた。そのうち何かあるでしょ?」

あっさり踏ん切りがついたレオンであった。

同刻、フィリアンノ城。

ミルヒオ レトリコが並んで歩いていた。

「勇者様のおかげで、無事に勝利を迎えられそうですね！」

「そうですね。・・・勇者様、コンサートは聞いていただくのでしょうか・・・？お帰りがあまり遅くなると、ご家族の方々が心配なさるでしょうし・・・」

「ほえ？何を言ってるのでありますか？」

「え？」

この時、一瞬時が止まったかのような状況になった。

「ど、どういう・・・こと・・・？」

「一旦呼んだ勇者は、元の世界には戻せないでありますよ？だからこそ、勇者召喚はめったに行われないわけでありまして・・・」

「は・・・はは・・・あはは・・・あははは・・・」

ひきつった笑みを浮かべるミルヒオ レ。その顔には汗が滝のように流れている。

「まさか姫様、ご存じなかったのでありますか？」

「・・・とはいっても、なんだかねで方法が・・・」

「ないでありますよ、そんなもんっ！！」

EPISODE 04 猫閣下VS死神鼠（後書き）

（レオンがいなくなってから続き！）

前回のあらすじ

桃香が壊れた。

「（華琳）・・・で？桃香があんな風なままだから私たちが呼ばれたわけ？」

「（雪蓮）いつまでもあのままって・・・ねえ？」

「（朱里）そうなんです・・・。いろいろ試してはみたんですが・・・」

「（愛紗）最近は雛里まで・・・」

『はぁ・・・』

続く！

次回、EPISODE 05 戦終わって

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3434t/>

異世界に呼ばれた雷鼠の物語～レオンのビスコッティ王国奮闘記～

2011年10月6日20時27分発行